琉球大学学術リポジトリ

2学期制導入の現状と課題

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1068

2学期制導入の現状と課題

藤 原 幸 男

Present Situation and Problem of Two Semester System in Japanese School

FUJIWARA Yukio

はじめに

近年、国内外の諸学力調査の結果から学力の低下傾向が明確になるにつれて、公立小中学校では、学力向上のための授業時数確保の必要性が叫ばれている。そのもとで、明治以来120年以上も続き慣れ親しんできた3学期制を2学期制に改める動きが急浮上している。学期の縮減によって始業式、定期試験、終業式の回数を減らし、その分だけ授業時数を増やして授業時数を確保するというのである。

3学期制から2学期制への変更は子どもと教師の学校生活を根本的に変え、保護者の家庭生活にも大きな影響を与える。このような大改革にもかかわらず、十分な説明がないまま導入に踏み切り、さまざまな混乱を生じている事態を見聞きする。(1)

ある保護者は、「11月の学習参観のお知らせ」で「平成17年度から2学期制導入」の説明会の実施を知って大変驚き、「今日の今日まで、教員・教頭・校長先生ら、学校側から何の説明もなく、いきなり実施すると言われても、親の気持ちも決まっていないし、納得のいくものではありませんでした」と述べている。そして、2学期制について、「子どもの健康や成長など教育現場は考えているのでしょうか」、「管理され、息抜きができない子どもの生活は、いったいどうなるのでしょうか」と子どもの側からの検討を訴えている。(2)

本稿では、2学期制をめぐる導入経過、2学期制についての教師・保護者・子どもの意識を検討するとともに、課題を明らかにすることを目的とする。

1 2学期制導入の経過

(1) 学期編成の基準

学期とは修学期間のことで、1年を単位とする学年をいくつかに区分した期間である。この学期制は、大学と小中学校とでは基準が異なる。

大学では、学期制は単位修得と密接に関係している。大学設置基準第21条によって講義及び演習については15時間から30時間で1単位とされ、第23条によって「各授業科目の授業は10週又は15週にわたる期間を単位として行うものとする」とされている。この規定により授業期間10週3学期としている大学もないわけではないが、大方の大学は授業期間15週2学期で学年暦をくんでいる。

これに対して小中学校では、学期については、学校教育法施行規則において、第3条（学校設置の認可手続き）の中に学則事項があり、第4条（学則の必要記載事項）で学則に「修業年限、学年、学期及び授業を行わない日（休業日）に関す

* 教育学教室(Department of Education, College of Education)

る事項」を記載しなければならないと書かれているだけで、大学に見られるような学期編成の基準にあたるものはない。学年については、４月１日に始まり、翌年３月31日に終る、と定めている。その間の休業日と授業時数を定めていて、授業時数については、各学年の各教科、道徳、特別活動および総合的な学習の時間のそれぞれの授業時数と各学年の総授業時数を定めているだけである。あくまでも年間の授業時数の実施が問題であり、便宜的に学期を区分しているに過ぎない。

歴史的に見ると、明治初期（1972年～1990年）の小学校は等級制による半年単位の教育課程が組まれ、事実上の２学期制だったが、1890年代以降年齢主義の履修原理に転換し、1900年の小学校令施行規則で４月１日から翌年３月31日までを学校年度とし、府県知事が学期を定めると規定されて以来、１年を３学期に分ける３学期制が採用されてきた。それ以来、義務教育の小中学校は３学期制をとってきたのである。

３学期制では、真夏とお盆に夏休み、真冬と正月に冬休みを設定し、夏・冬の長期休業の前に終業して長期休業に入り、長期休業明けに新学期に入るというやり方をとっていた。「健康を害して学習に支障をきたす可能性がある時期と伝統・習慣に関する行事が行われる時期を長期休業」にし、「国民性に合致してきたからこそ今まで継続されてきたとみられる」のである。(3)

(2)　２学期制の浮上

もともと２学期制は、日本の学校はアメリカなど外国の学校と比べて学年開始にずれがあり、国際化時代にあって外国との交流を考えて10月入学ができるようにしていくという意図から構想されたものである。２学期制が議論された当初はもっぱらこのことが問題であった。

ところが、1998年12月14日に文部省告示によって学習指導要領が改正され、学校完全週５日制の下での教育課程が始まるにともなって、同年12月に学校教育法施行令が改正され、学期及び休業日については、第29条で「公立の学校(大学を除く)の学期及び夏季、冬季、学年末、農繁期等における休業日は、当該学校を設置する市町村又は都道府県の教育委員会が定める」とされた。これまでは「都道府県教育委員会が定める」としていたが、「当該学校を設置する市町村又は都道府県の教育委員会が定める」と改正した。こうして市町村教育委員会で学期を決めることができるようになり、これまでと比べると２学期制の導入は制度的に容易になったのである。

1998年12月改訂の学習指導要領は完全学校週5日制の教育課程を求め、月２回の土曜日にくんでいた授業時間をなくし、年間総授業時数を週当たり２単位時間削減した。教育課程としては、「各教科の内容を授業時数の削減以上に厳選し基礎的・基本的な内容に絞り、ゆとりの中でじっくり学習しその確実な定着を図るようにする」とともに、「総合的な学習の時間」において体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図り、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」とした。

しかし学校は、当初文部省（現在は文部科学省）が考えていたほど日常の学習指導に「ゆとり」がなく、学力低下批判が高まる中でこれまでの教育課程にプラスして少人数指導・習熟度別指導、補充学習と発展学習に時間をとる必要にせまられていった。改革の目玉だった「総合的な学習の時間」は地域の人々との連携などに時間が取られ、その成果も目に見えるようにはあがらないことも少なくなかった。それ以外に、教育評価の改革によって絶対評価が導入され、これまでと比べて通知表の作成にかなり多くの時間をとられるようになった。学校評価も求められ、学校の存在をアピールしなくてはならなくなった。明らかにこれまでと比べて学校業務が過重で、学校生活が過密になり、教師に時間的「ゆとり」がなくなった。また、これまで月２回土曜勤務の分を長期休業に振り返ることが認められていたが、完全週５日制に移行してそれがなくなり、夏季休業においてほとんどを学校で勤務しなければならなくなった。これと関連して、教師を無為に過ごさせるのではなく、夏休みを利用して学習指導に役立てようという考えも強まっていった。

このような学校生活をめぐる状況の変化の下で、ゆとりある教育活動と「自ら学び、自ら考える力」の育成をいっそう推進するものとして、２学期制が浮上した。2002年度に仙台市が市立小中学校全校に一斉に２学期制を導入したことが注目を浴び、同校への参観者が増えた。2004年度に金沢市が小

中学校全校で2学期制を導入するなど、２学期制を採用する自治体が増えた。2003年７月の文部科学省調査（「平成15年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」）によれば2003年度に３学期制以外の学期区分を採用している公立学校は３％未満だったが、その後に2003年10月に中教審答申で、授業時数確保のための具体策として「二学期制の区分の工夫」を例示したことを契機に全国で２学期制導入の動きが一気に広がり、2005年４月には全国の公立小中学校で12％に達したと言われている。いまや無視できない数になってきている。

2　２学期制についての教師・保護者・子どもの評価

完全学校週５日制はこれまでの学校生活のリズムとありようを大きく変えるものであった。平日が過密で、休日をゆったり過ごすという過ごし方は、大人でも難しい。子どもからは、平日が過密で、休日には何もしたくないという声も聞こえる。また、土日の２日間が休みになることによって休み疲れが出て月曜日の授業が活性化しないという声も聞かれる。教職員は月曜日から金曜日までの５日間では仕事をこなせず、平日の夜、土曜日に仕事をもちこす。このような完全学校週５日制になじみきれないうちに、学期区分が大きく変わるのである。

２学期制は４月から10月初めまでを１学期とし、それ以降を２学期とする。必然的に長期休業（夏休み・冬休み）を間にはさみ、学期が継続する。さらに、「けじめ」をつけるために、人為的に１学期と２学期の間に数日間休みを設ける。こうして、なんとなく精神的に落ち着かない。２学期制では、だらだらと続いているという印象をもちやすい。

以下では、２学期制をめぐるいくつかの調査をとりあげ、２学期制についての教師・保護者・子どもの評価を検討したい。

(1)「２学期制」先進導入校アンケート調査[4]

１）教師の評価

①　子どもの学校生活の変化

「学校での学習の様子の変化」は、「変化あり」が小学校31.3％、中学校17.1％で、小学校のほうが影響が大きい。「変化なし」が小学校・中学校とも約60％ある。不明が小学校9.3％、中学校で22.9％あり、判断に迷っている様子が見える。

「学校での学習以外の生活（行事など）の変化」は、小学校18.7％、中学校22.9％で、中学校のほうが影響が大きい。「変化なし」が小学校59.4％、中学校51.4％で、不明が小学校21.9％、中学校25.7％で、ここでもかなり判断に迷っている様子が見える。

②　指導・評価・行事・勤務内容などの評価

「学習指導へのゆとり」は「できた」が小学校50.0％、中学校28.6％で、小学校のほうが多く、「児童・生徒への指導時間の増加」は「増えた」が小学校40.6％、中学校31.4％で、これも小学校のほうが多い。「児童・生徒へのていねいな評価」は「できるようになった」が小学校56.3％、中学31.4％で、小学校のほうが多い。

「学校行事の準備期間」は、小学校で「とれるようになった」が23.1％、「変わらない」が73,1％で、全体としては「変わらない」という傾向である。中学校で「とれるようになった」が6.5％、「減った」61.2％で、減少傾向にあるといえよう。

「校務は楽になった」については、小学校2.9％、中学校6.3％で、「楽になった」と感じている人はほとんどいない。小学校では「忙しくなった」が57.1％と多く、中学校では「変わらない」57.1％と多い。

③　総合評価

「どちらともいえない」が小学校56.3％、中学校54.3％で、態度を保留している。そのなかで、次に多いのが小学校で「よいと思う」31.3％、中学校で「よいと思わない」22.9％である。全体としては判断を留保しつつ、小学校でやや肯定に向かい、中学校で否定に向かっているといえよう。

④　まとめ

２学期制については、小学校・中学校いずれの教師も半数が態度を保留しており、残りの半数も賛否両論である。２学期制は「学習指導へのゆとり」と「指導時間の増加」を生み、長期休業前のあわただしさの減少（小学校71.9％、中学校48.6％）を生み、小学校で「よりていねいな評価」（56.3％）ができるようになったが、学校行事への

準備期間は小学校で「あまり変わらない」、中学校で「減った」し、学校行事に力を入れるだけの余裕がない。校務の負担は小学校で増え、中学校でも変わらない。２学期制は、学級担任制を基調とする小学校のほうが融通が利く分だけ効果があるようだが、教科担任を基調とする中学校では諸調整が難しく、また対外的な行事、進路指導などの独自な仕事があり、その分だけ効果は十分とは言えない。校務負担は変わらないか、増えている。多忙を解消するにはいたっていないといえる。

２）保護者の評価

①　２学期制実施による「家庭生活」の変化

「自宅学習面」「自宅学習面以外での生活」「子どもの長期休暇の過ごし方」については８割以上が「変化なし」、「子どもの生活のゆとり」については７割が「変化なし」と答えており、大部分の保護者は、２学期制の実施による家庭でのめだった変化はあまり見られない、と受け止めていた。「変化あり」と答えていたのは１割前後である。小学校と中学校との間にはほとんど差がなかった。

②　２学期制実施に伴う不安やとまどい

「テストの機会の減少」「通知表の回数の減少」については、小学校よりも中学校のほうが約２倍不安を感じており（前者は小学校22.5%、中学校43.5%、後者は小学校23.8%、中学校38.8%）、長期休暇については、小学校も中学校も「とまどいはない」ほうが「ある」よりも多い（とまどいがある46.3%、とまどいがない27.5%）。

③　総合評価

「３学期制に比べて２学期制はよいか」については、保護者の半数（小学校43.8%、中学校57.5%）は「どちらとも言えない」としている。小学校と中学校を比べてみると、「よい」は小学校30%、中学校16.5%で、小学校のほうが「よい」が約２倍多い。また、「よいと思わない」は小学校23.7%、中学校24.7%である。賛否については、半数が判断を保留していて、それ以外をみると、小学校が「よい」、中学校が「よいと思わない」にやや傾いているにしても、全体としては判断に迷っているようである。

(2)　仙台市教職員組合の２学期制アンケート調査[5]

仙台市では、2002年度から全小中学校で２学期制が一斉導入された。仙台市教育委員会は「二学期制等新教育課程に関する調査」を2003年度に実施し、「二学期制は順調だ」としたが、この調査は市内全校の教頭だけを対象にしたものであり、「２学期制になって特によかったこと」を３つ選択させるもので、課題や改善点を書き込む項目はなく、「二学期制を定着させる」ための恣意的な調査だった。

仙台市教職員組合が全教職員に実施したアンケート調査（2003年5月実施、588名）は課題・改善点を含めて回答を求めたものである。その調査では、２学期制に関して「問題ない」と回答したのは１割程度で、ほとんどの教職員は２学期制に対して何らかの疑問や不満を抱いている。「区切りが不自然である」「１年を経過したが、何がいいのか、よくわからない」「子どもたちの、新学期を迎える喜び・学習への意欲がなくなった」などを、半数以上が感じている。また約８割は、２学期制によって「ゆとりができた」と思っていない。約35%の教職員が「２学期制によってゆとりがなくなった」と感じている。その最大の理由は、秋休み前後の時期が超多忙になったことだと言う。また、通知表は１回減ったが、ほかの仕事が増えたので全体では今までと変わらず、あるいは今まで以上に多忙になっていると言う。

子どもたちに実施したアンケート調査（2002年11月実施、小学生65名、中学生108名）では、「２学期制がいい」23%、「わからない」27%、「３学期制のほうがいい」49%という結果である（自由記述を分類）。「夏休みが終わっても一学期がつづいているというのは変な感じがする」「学期が終わったときのパアッとした気持ちと、はじまったときのがんばるぞという新しい気持ちが味わえなくなった」（自由記述）と回答している。

保護者に対する調査（2002年11月実施。116名）では、「２学期制がいい」12%、「３学期制がいい」44%、「わからない」43%という結果で、２学期制を支持していないといえる。「休み前の通信表がなく様子がわからない」「区切りが不自然」「夏の学習意欲がわかない」「違和感・戸惑い」などが回答の上位にあがっている（自由記述を分類）。

(3)　先進校以外を含めた保護者の「２学期制」制度改革への賛否

保護者の判断の迷いは、ベネッセ未来教育センター「学校教育に対する保護者の意識調査（速報データ）」（2004年４月）にも現れている。[6]

「次のような取り組みが実施されたり、制度の変更が行われるとしたら、あなたは賛成ですか反対ですか」の質問に対して、「１クラスあたりの子どもの人数をもっと少なくする」に81.9%が賛成したのが賛成の最上位にあがっているのに対して、「３学期制をやめて、年間を前半と後半にわけた２学期制にする」は「賛成」は27.1%と、諸回答のうちで賛成が最下位で、「わからない」が31.1%と多く「反対」は40.2%にものぼっている。「反対」がやや多くなっている。保護者は２学期制をあまり希望していないことがわかる。

3　２学期制をめぐる課題

授業時数の増加が２学期制移行への大きな動機だが、２学期制推進者でさえも、「単に授業時数を増加させたいという願いだけで二学期制を取り入れることは、余りにも安直な方法だといわざるをえない」[7]という発言が出ている。「時間の確保は、それ自体が最終的な目的ではなく」、「あくまでも多様な学習を可能にするための条件にしかすぎない」[8]のである。２学期制の中でどんな活動を展開するのか、どんな学校をつくるのかを構想し、それとの関連で２学期制の意義と効果を論じる必要がある。

子ども・教師・保護者のいずれも３学期制が身体になじんでいて、生活リズムをなしているのに対して、２学期制は区切りが不自然であり、違和感がある。それにも関わらず２学期制の学校を構想し、実施するとすれば、「学期制」の原点に立ち返る必要があるし、教師・子ども・保護者の諸疑問にていねいに応えて納得のいくものにする必要がある。

まず、「学期制」には、「児童生徒に対して、区切りによりけじめをつけさせ、新たな気分で次の学期に移ることができる」し、「教員にとっても、仕事の区切りを明確にして発想を新たに教育活動に取り組むことができる」というメリットがある。[9]「本来『学期』とは学校における児童生徒の生活や学習活動に一つの区切りをつけ、節目とリズムとを与える役割を果たすものである」[10]といえる。授業時数確保を意識して無学年制を提唱した自治体もあるが、児童・生徒が「節目とリズム」なしに一年間学校生活を送ることができると考えるのは、あまりにも人間の学習と生活の心理と生理に無頓着だといわざるを得ない。

(1)　学習・生活の質的な発展を見通す

このような中にあって、１つには、学校は子どもと教師にとって共同生活の場であることの確認が必要であり、学期は単に便宜的な区切りなのではなく、４月から翌年３月までには、学習と生活において質的な発展が見られ、月日が経つにつれていっそう充実した学校生活になるという視点を根底にすえることが重要になる。

中森孜郎は、「一学期は、学校生活や授業を軌道にのせる時期、二学期はそれを受けて授業や学校生活を充実発展させる時期、三学期はそれらの集大成をはかりながら、一年間を振り返る時期ともとらえられる」とし、「多くの先生方は、そういった年間の見通しをもちながら、各学期の授業や生活指導や課外活動の指導にあたっておられるのではないでしょうか」と述べている。そして、「いくつかの学期に区切ることによって、その学期学期を見通しをもって活動し、学期末には達成度を評価し、課題を明らかにすることでメリハリをつけるということが可能になる」と述べている。[11]

２学期制はこの発展はどう見通すのか。このことに触れた文献は多くないが、数少ない中で丸山綱男は、現行の３学期制では、「児童・生徒が学期の中程から学びのエンジンが全開になって調子が出始め、さらに何かをしようとする直前で学期が終了してしまうという場合が多く、ゆとりが十分にあるとはいえない状況である」と３学期制の問題点を指摘するとともに、３学期は「まとめ」の時期とされ、「何か新鮮な気分になれない時期」になりがちだとする。２学期制では１学期は「基礎」、２学期は「充実発展」の時期で、２学期は「前半の学期で蓄えた基礎・基本をもとに、『心のゆとり』や『学びのゆとり』を充実させ、学びの発展を図る期間として位置づけられる」と述べている。[12]

たしかにこのような実践上の問題点はあったか

もしれない。３学期制でも、この問題点を意識し、「充実発展」をはかりながら「まとめ」につなげることはできるように思えるが、２学期制のほうがいっそうよくできるというのなら、このような視点から教育課程を開発して納得のいくように明瞭に示す必要があろう。このような教育課程開発をともなうことによって、２学期制が子どもと教師にとって意味あるものになるだろう。[13]

(2) 学校行事等の意味を問い直し、学習と生活の質的発展に位置づける

２つには、３学期制のもとで慣習的に行ってきた学校行事等の意味を問い直し、学習と生活の質的発展の中に位置づけることである。

これまで行ってきた学校行事も、時期が違えば意味合いも異なってくる。４月の家庭訪問は、子どものこれまでの生活をよく知り、これからの指導に役立てることに重点が置かれる。それが授業時数確保のために家庭訪問を夏休みにするとなると、夏休み前までの子どもの頑張りの評価と、今後どのようにしていけばいいかの学習と生活の相談に重点が置かれることになる。運動会や学習発表会も、１学期前半に行うのではこれからの学習と生活の動機づけと発展のきっかけという性格が強いが、２学期中頃から後半に行うのであれば、学習成果の発表とまとめの意味合いが強くなる。

また、長期休業前には、集会などを通して学習への気持ちの切り替えを指導する機会が必要になるが、２学期制になると、「２学期に向けてがんばろう」ではなく、「これまでの学習と生活を発展させ、休み明けの成果の発表に向けてがんばろう」となる。このように、学期の質的発展を見通して学校行事などを意味づけ、それを子どもたちに意識させ、学級の共同創造を生み出していくことが大切になるのである。

(3) 学習の連続性をはかる

３つには、学習の連続性についてである。２学期制の提唱に関わって、学習の連続性が確保できるという利点が言われる。この学習の連続性には、大きく区分すれば、授業期間中における学習の連続性と、長期休業中の学習の連続性の２種類がある。授業期間中における学習の連続性には、行事による途切れの克服も含まれている。

①　６月末から７月夏休み前の１学期末の途切れの克服

学習の連続性については、ふつうに考えれば学期途中に長期休業が入るので、夏期休業での学習の連続性が真っ先に問題にされるが、２学期制を決断し実施した先進的な学校は、学習の連続性に関しては、まず授業期間中における連続性を利点としてあげている。

３学期制では、４～５月は学級事務、学級経営などに忙殺され、肝心の学習進度は遅れがちになるが、６月にはいると７月学期末の通知表作成の業務が頭をかすめ、６月下旬から学習進度に気を使いながらテストを行い、評価のための教科指導を行うことになりがちである。授業時数もテストなどに充てられ、細切れになりやすく、学習の連続性が途切れてしまいがちである。これに対して２学期制では、６月下旬から７月夏休み前までどの学年も目いっぱい教科学習や体験的な校外学習を組むことができる、というのである。[14]（ここでは夏休みの場合をあげて論じたが、冬休みの場合も基本的には同じである）。

以上みたように、２学期制には、授業期間における学習時間の確保によって学習の連続性をはかりやすいという利点があることは確かである。そこに大きな利点があるといえる。

②　夏休みの途切れの克服

これまでの３学期制では、６月までの課題設定、課題追求が、７月の学期末評価に追われて取り組みが途切れてしまう。課題意識も熟成していないので、夏休みの課題も教科補充の問題集や作品程度になり、夏休みに入る。夏休みを９月以降の学習に生かしきれずに終わっていた。これに対して２学期制では、６月末から７月夏休み前までにたっぷりと教科学習と体験的な校外学習に取り組むことができるので、課題意識を熟成させて課題意識をもって夏休みに入ることができる。そのために夏休みでの学習の取り組みが実のあるものになりやすく、９月以降の成果の発表が期待できる、というのである。

たしかに、その側面はある。しかし、長期休業は子どもにとっては休みにちがいはなく、子どもの休息権を保障するという視点も必要である。夏休みも管理され息抜きができないようだと困る。そうすると、授業期間と同じような意味での学習

の連続性は期待できない。だらだらと学期が続くという意識は残る。また、児童生徒の自主性を尊重しつつ学習の連続性をはかることを留意しないと、学習の押し付けにもなりかねない。

何もしないで夏休みに入るのには教師・保護者・子どもに不安があるので、対策として、授業期間中に何らかの中間評価と教育相談が必要になる。そのとき、自主性を尊重し自主性を伸ばすような指導が意識的になされる必要がある。中間評価と教育相談に時間をかければ学習時間確保の利点が薄まり、３学期制のときとあまり変わらないことにもなる。このあたりの兼ね合いをどのようにするかが、課題になるだろう。

③　行事による途切れの克服

行事による途切れの克服は３学期制でも可能であり、２学期制の利点というよりは、学習の連続性の確保における留意点だと考えたほうがよいが、２学期制実践校では、学芸会を総合的な学習の課題を解決するための機会として位置づけ、実践することをあげている。総合的な学習の学年テーマにせまるために共通体験活動として伝統芸能を伝える人から和太鼓を学び、それを学芸会で発表する。そのことによって、和太鼓の学習は、学芸会の出し物のための学習ではなく、総合的な学習の課題を解決するための学習になった、という。「行事があるから忙しくなるという従前の学びの途切れと行事に追われることでの多忙感・徒労感は、子どもにも教師にもない」というのである。[15]

総合的な学習などの学習と行事の結合は重要であり、この観点から行事の見直しをする必要があるが、一方で留意すべきなのは、学校行事は総合的な学習のためにあるのではないということである。学校行事の中には、時間をかけた取り組みをとおしてクラスの自治と共同を生み出し、学習と生活の基礎を固めるという側面もある。このような自治と共同の育成という学校行事独自のねらいを加味して学習の連続性を考える必要がある。

学校行事が余りにも多く時間をとられすぎている現実からすると、ある程度の精選は必要かもしれないが、学校行事の意義を認識しないと、学校行事の簡素化・希薄化を生み、学校行事の持つ教育力を喪失させることにもなりかねない。[16] 学校行事の意義を踏まえ、ときには時間をかけてでも計画・実践して、その教育力をフルに引き出すことが長い目でみると重要になるのである。

(4)　教師集団と保護者の納得を得て共同創造する

地方自治体での２学期制の導入の方法をみると、まずいくつかの実験校で実施し、その成果を十分検討しないうちに既定路線にそって次年度に一斉に全校導入するという仕方をとっている点で共通している。そこからさまざまなトラブルや紛争が生まれている。

まず、「市町村単位で（場合によっては都道府県単位で）、その地域におけるすべての学校が画一的に二学期制になることによって、個々の学校における創意工夫の余地を狭くするという問題点も考慮しなければならない」。[17] 教師のほうも賛成できないと思っていても「どうせ言っても無駄だ」と諦めてしまい、校長などの管理職から言われるままに流されてしまいがちである。

しかし、２学期制はあくまでも「ゆとり」ある教育活動を生み出すための１つの外的条件にすぎない。３学期制と同じ感覚で実践していけば、実質的には、長期休みと秋休みの直前で区切る４学期制になり、３学期制のときよりも学習の途切れが目立つことにもなりかねない。２学期制の理念などについて議論するとともに、現実の学校に足場を置き、いま学校にどんな問題があるのかを事実にもとづいて出し合うことが大切だし、その出し合いを踏まえて、どんな学校をつくるのか、どんな教育活動を展開するのかを学校の全教職員で議論していくことが重要である。このことをとおして、教師集団の協働性を生み出し、２学期制の特質を生かした教育課程と教育実践を創造することが重要になるのである。

保護者への説明も重要なのだが、２学期制移行についての保護者説明会のときに教育委員会に説明させそれで済ませている事例も見受けられる。学校が説明するにしても、「自治体全体で２学期制を導入することになりましたので、本校もそうなりました」で済ませたり、教育委員会の２学期制のスローガン（特徴的なことば）を繰り返すだけで学校の実情にあった説明をしないで済ませたりする事例もある。それでは学校の主体性が問わ

れる。学校として２学期制をどのように受け止め、どのように教育活動を展開して、充実した学校生活を創造していこうとするのかの説明がないと、保護者は納得しない。[18]

子どもや保護者からすると、「二学期制は、児童・生徒、保護者を巻き込んで吟味されたものではない」[19]。ある日突然に来年度から２学期制になると知らされて、一方的な進め方、手続きの不備に怒りを覚えるとともに、その内容についてさまざまな疑問がわき、２学期制のもとでの学校での学習と生活への不安でいっぱいになる。

学校が地域にねざした存在であるとすれば、保護者と地域の声を無視できないはずである。２学期制は身近な大きな制度改革である。学校は保護者の疑問と不安と不信の声に応える説明責任がある。疑問と不安と不信に応えていく中で、教師集団も性急さとあいまいさに気づくし、それに応えていく過程で教師集団の協働性も強まっていく。そして、より現実にねざした無理のない２学期制の教育課程と実践が生まれていく。２学期制が学校創造にとって必要であるのならば、保護者を敵にするのではなく、学校の共同創造者として位置づけ、保護者の参加のもとで納得のいく２学期制を切り開くことが求められている。

注

(1)　「行事集中、ゆとりない――２学期制考えるシンポ」、『琉球新報』2004年12月14日付。

(2)　大森ひろみ「二学期制導入、父母への説明十分に行って」、『沖縄タイムス』2004年12月26日付。

(3)　富士原雅弘「歴史に見る学期制」、『教員養成セミナー』2004年11月号、32頁。

(4)　「教師、保護者が考える『２学期制』の『ここがいい！ここが問題！』」、『総合教育技術』2004年３月号。このアンケート調査は、「２学期制」をすでに実施している宮城県、石川県、京都府の小学校４校、中学校３校の教師184人、および児童・生徒の保護者460人に、2003年末から2004年にかけてアンケートを配布、回収したものである。回収率は小学校教師が31.1％、小学校の保護者が33.1％、中学校教師が44.4％、中学校の保護者が45.5％である。なお、以下の論述では、牛渡淳の「分析／『2学期制』アンケート結果」を参考にした。

(5)　田中元「二学期制で教育の困難は解決できるのか」、『クレスコ』2004年７月号。

(6)　調査時期は2003年12月～2004年１月。学校通しによる家庭での自記質問紙調査。

全国の小２、小５、中２生をもつ保護者6,288名を対象。回収率は74.0％。

(7)　大風秀康「２学期制のメリットと導入のノウハウ(11)」、『学校マネジメント』2005年２月号、67頁。

(8)　牛渡淳「『２学期制』教育課程の工夫と保護者への説明ポイント」、『総合教育技術』2004年３月号、44頁。

(9)　「学期」、今野喜清・新井郁男・児島邦弘編『新版・学校教育辞典』教育出版、2003年。

(10)　山口満「２学期制と教育課程編成」、高階玲治編『二学期制の学校経営＜導入と展開＞』教育開発研究所、2003年、35頁。

(11)　中森孜郎「仙台市教委がすすめている二学期制導入について」、『仙台教組新聞』2001年２月28日付。

(12)　丸山綱男「２学期制による『ゆとり』の創出」、高階玲治編『二学期制の学校経営＜導入と展開＞』教育開発研究所、2003年、28頁。

(13)　たとえば、インターネット調査によれば、福岡県糟屋郡志免町立志免南小学校では、４～９月を実態把握、経営案作成、学習の基礎・基本の確立、10～12月を学習の充実、１～２月を学習の発展、３月を学習のまとめ、としている(http：www.ms-minami@shime.jp)。

(14)　仙台市立東二番町小学校「教育改革の理念を具現する２学期制の学校経営」、『学校経営』2003年６月臨時増刊号、54頁。なお、これに関連して、仙台市立東二番町小学校『２学期制実践テキスト』小学館、2003年を参照されたい。

(15)　同上、54頁。

(16)　今西康子「どんどん変わる公立中学校」、『草思』2005年４月号。今西は「文化祭も規模が縮小されて、たったの半日だけになった。……どんどん無難で面倒臭くない方向に流れていく傾向は、学校生活のあらゆる面に及んでいる。文化祭縮小もその一つだが、週休二日制に伴う

授業時間数の減少に対処するために、さまざまなことが、済し崩し的に簡略化されつつある」と述べている（同、44～45頁）。

(17) 堀井啓幸「『二学期制』導入検討のために学校管理職が押さえるべき基本的な視点」、『学校経営』2003年10月号、15頁。

(18) 「座談会／来年度導入校が先進導入校に聞く、『２学期制への疑問と不安、どう解決すればいいのか？』」、『総合教育技術』2004年３月号、41頁。この座談会で、導入２年目の中学校教務主任は、「私は思うのですが、やはり『自治体全体で導入することになったので、本校もそうなりました』では保護者は納得しません。『本当は先生は、２学期制を嫌っているのでしょう』なんて言われかねません。……『こういうことがやりたくて２学期制にしたいと思っていたのですが、おかげさまで自治体全体で導入することになりました、』くらいのことは言わないとね」と発言している。

(19) 前掲(15)、16頁。

２学期制に関する文献

中森孜郎「仙台市教委がすすめている二学期制導入について」、『仙台教組新聞』2001年２月28日付。

「特集、『２学期制』の試みと課題」、『総合教育技術』2002年11月号。

- 矢内忠「現状リポート／静かに広がりつつある『２学期制』」
- 戸塚美子「先進校に学ぶ、『２学期制』の年間カリキュラム――宮城県仙台市の小・中学校の試みから――」
- 天笠茂「『２学期制』の可能性と導入の問題点」

仙台市立東二番町小学校「教育改革の理念を具現する２学期制の学校経営」、『学校経営』2003年６月臨時増刊号。

「特集、加速する『２学期制』――先進導入校の実践に学べ！」、『学校経営』2003年10月号。

- 堀井啓幸「『二学期制』導入検討のために学校管理職が押さえるべき基本的な視点」
- 小室信「二学期制のスムーズな導入、運用に向けた現場の課題」
- 「『二学期制』をめぐる13の疑問――導入校はどのように実践しているか」

仙台市立東二番町小学校『２学期制実践テキスト』小学館、2003年10月。

森隆夫「二学期制への疑問」、『悠』2003年11月号。

高階玲治編『２学期制の学校経営＜導入と展開＞』教育開発研究所、2003年11月。

「特集、『２学期制』の教育課題解決力を問う」、『総合教育技術』2004年３月号。

- 天笠茂「『２学期制』のメリットとデメリットを冷静に検証する」
- 矢内忠「『２学期制』普及の現状とこれから」
- 神奈川県横須賀市立森崎小学校「『個に応じた指導』の一層の充実は、いかに図れるか」
- 京都府京都市立高倉小学校「『総合的な学習の時間』の一層の充実は、いかに図れるか」
- 宮城県仙台市立上杉山中学校「『必要な学習指導時間の確保』は、いかに図れるか」
- 「『２学期制』先進導入校アンケート調査＆分析、教師、保護者が考える『２学期制』の『ここがいい！ここが問題』」
- 「座談会／来年度導入校が先進導入校に聞く、２学期制への疑問と不安、どう解決すればいいのか」
- 牛渡淳「『２学期制』教育課程の工夫と保護者への説明ポイント」

大風秀康「連載、２学期制のメリットと導入のノウハウ１～12」、『学校マネジメント』2004年４月号～2005年３月号。

田中　元「二学期制で教育の困難は解決できるのか――斉導入までの経緯とアンケート調査の結果から―」、『クレスコ』2004年７月号。

葉養正明編『２学期制の工夫と効果的な運用』ぎょうせい、2004年10月。

「特集、２学期制を考える」、『教員養成セミナー』2004年11月号。

- 北俊夫「広がる２学期制――その背景と課題を探る」
- 「２学期制が分かるQ&A」
- 「02年度から全市立校で実施、仙台市」
- 「３学期制に戻した群馬県立藤岡北高校」
- 富士原雅弘「歴史に見る学期制」

今西康子「どんどん変わる公立中学校」、『草思』2005年４月号。

赤田圭亮「『ゆとり教育』から『ゆとりも学力も』へ――今、学校で何が起きているか――」『現代思想』2005年４月号。

「三学期制・二学期制・通学年制」、『最新教育基本用語・2005年版』小学館、2005年５月。